単元の言語活動２

作家の工夫を意識して文章を書く　――文学が伝えているのは、ストーリーだけではない――

活動のねらい

それぞれの教材においては、具体的な文章に即してテーマをつかみ、言語活動ではテーマと時代状況とのかかわりを考えるなどの活動を行った。単元の言語活動では、そうした内容を効果的に読み手に伝える文章の工夫に着目する。特に、人称や時制などの語りの違いについて、三編の小説と随筆を横断して比較しながら分析し、各自が文章を書く実践を通じて総合的に理解する。

タイトル・序文の解説

いずれの教材でも、他者とのかかわりが話題になっていたことを改めて思い出したい。「待つ」では周囲の状況に同調できない頼りなさと強さが、「うそとパン」では生きることの緊張を解くおもいやりが、「写真班」では自分の生活の根幹的な部分を他者に揺さぶられる不安感が描かれていたが、それぞれ、読者に効果的に伝えるための語りが工夫され、構成されている。逆に、そうした他者との親しみやぎこちなさは、語りによって読者との間に設けられる距離の粗密を通してでなければ表れてこないと言えるほどである。このような語りのしかけは、虚構の小説であっても、筆者の体験を描いた随筆であっても一様に見出し、分析することができる。「ストーリー」とは一般に、小説や随筆内のできごとを、客観的に、かつ起こった順番に並べなおしたものだが、ここではそれを抽出する以前の文章の伝達法を考えてみたい。

「課題」の解説

課題　他人からの働きかけが、うれしい場合、あるいは違和感がある場合を思い浮かべて、文章を書いてみよう。自分で書いてみることで、作家の書き方の工夫を実感してみよう。

自分の日常的な体験を経由して、文学的な表現が身近なものであることを理解したい。文学的な文章が歴史の中で練り上げてきた表現の形式は、必ずしも文学作品を書くことを目的としなくても、他者とのかかわりや、それに伴う感情を描き示す際に効果を発揮する。社会の中で生きる以上、他者との関係は必須であるが、それはうれしいことばかりとは限らない。相いれない場合に、どうしたら理解に近づくか、理解できなくてもどのように尊重し、共生するかという問題が発生する。直接相手に意見を投げかけるか、第三者に提示して共通に考えるべき問題とするか、作品を参考にしながら、表現の方法を考える。

活動の解説

1　『待つ』を振り返り、一人称の語りの特徴を考えてみよう。「私」は、周囲とは異なる考え方を持っている。それを表す際に、一人称だとどういう点が効果的か。

一人称は一般に、人間味があり、物語世界の中の人物から直接話を聞くことで、その世界と読者の距離を近づける効果がある。この作品では、冒頭から「思い思いの方向に散っていく」（二一〇・8）までは状況説明的だが、その後は疑問形や、「言葉と表現」1で確認した否定形が続き、自分の考えを人に伝えるための整理が不足しているように見える。そのため、独り言をこっそり聞いているような気にもなる一人称である。だが同時に、「学習のポイント」3で確認した通り、第四段落・第五段落には明確に「あなた」という宛先がある。「学習のポイント」1で見たように、作品の舞台は、国民全員が同じ行動規範に従うべきとされる戦争の時期である。その中にあって、独り言でしか言えないような内緒の事柄を、読者の「あなた」にだけ打ち明けているというような印象が生まれ、「あなた」も周囲には公言できないことを考えることはないでしょうか、と誘うような語りである。

2　『うそとパン』を振り返り、『待つ』の一人称との違いを考えてみよう。

①　「　」内の伸子さんの言葉の意図を「私」が推測している部分、捉え損ねている部分を抜き出してみる。これは、一人称の視点がどのようなものだからだろうか。

「私は簡単にだまされた伸子さんをちょっと滑稽に思った」（二一七・13）とあるが、お弁当を用意してくれていたその後の心遣いの部分を読むと、「伸子さん」は「私」のウソをどこかで見抜きながらわざと気がつかないふりをしてくれていた可能性もあり、当時の「私」はそのことをとらえ損ねている。「パンはこのところずっと、伸子さんの一人前より余計に用意されていたものらしい」（二一九・1）では、おそらく「伸子さん」が「私」に配慮して明確には説明しなかったことを、「私」が推測して語っている。一人称の視野は限定されており、他の人については見えない部分があると言える。

②　①は、㋐過去の事件当時の「私」の考え方、㋑当時を解説できる大人になった「私」の意識、どちらを優先していることによるか、また、そのことの効果は何か。

㋐を優先している。現在の「私」は当時の「伸子さん」の意図を理解しているが、先行きを見通せない当時の「私」に即してできごとが語られることで、読者も「私」と同じように驚きを追体験することになる。最後に、「その日からもう三十何年になる」（二一九・4）以降、当時の「私」が気づかなかったことがあると種明かしし、それがどのような意味を持つ出来事だったのかを説明する俯瞰的な視点が組み込まれて

いる。その点で、同じ一人称と言っても、「私」の主観だけを伝えることで効果を上げる「待つ」とは、だいぶ異なると言える。

3　『写真班』を、漫画にするとしたら、または、コントとして演じるとしたら、どんなものになるだろうか。それを通して、『写真班』のおもしろさはどこにあるか、また、三人称を採用しているのはなぜか、考えてみよう。

まず、畳みかけるセリフのやり取りのおもしろさを味わいたい。問いかけに対する回答が微妙にずらされていくところや、写真班や電気屋が「彼」にぐいぐいと迫ってくる動作など、面白いところは自由に考えたい。

そのうえで、漫画ならあぜんとする「彼」を外側から描写する、コントなら「彼」役がそのような演技をして反応を示すことで、写真班や電気屋の不条理さは可視化され、一層明確になるだろう。作品の地の文では、実は「彼」を「私」や「ぼく」に変えてもだいたいは成り立つような視点が採用されている。だが、「二の句が継げずたじろいだ」（二二五・９）や、「彼の顔は少し赤くなった」（二二七・７）、「目を白黒させながら」（二三〇・８）など、三人称ならではの外側からの描写がみられる。文章における三人称はこのように、「彼」の感情に同調するよりは、「彼」との間に距離を作る。「彼」を笑えるのも、読者が自分と切り離し、他人事として見られるからである。そうした距離を通して、読者は批評的な立場を獲得できると言える。

4　課題にあるとおり、文章のテーマを構想してみよう。自分の体験でなくても、見聞きしたエピソードや、想像でも構わない。それは、読者にストレートに伝えてよい事柄か、遠回しにするべき事柄か考えたうえで、1～3のどれかを意識して実際に文章にしてみよう。出来上がったものについて、グループを作り、互いに感想を述べ合ってみよう。

プライバシーや書きにくさに配慮し、自分の体験でなくても構わないということにする。うれしい事柄や、逆に違和感がある事柄を、できごとの当事者に直接伝えるのか、体験の意味を第三者に伝えることを目指すのかを構想し、それにふさわしい語り方を考えていく。仮に違和感があった、傷ついた、怒りを覚えたなどのネガティブな感情を、直接当事者に伝える構想にする場合でも、決裂のためではなく、関係継続のためであることを前提とする。そのためにはどのように配慮しながら伝えればよいかを考えさせる。余裕があれば、同じテーマを複数の語り方で書き分け、どれが効果的かを考えてもよい。感想を述べあう活動についても、それぞれの体験やそれについての立場は否定せず、尊重しながら行うように留意する。

評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。〔知・技〕(1)ア
(2) 文章の意味は、文脈の中で形成されることを理解している。〔知・技〕(1)エ
(3) 我が国の言語文化の特質について理解している。〔知・技〕(2)ア
(4) 時間の経過や地域の文化的特徴などによる言葉の変化について理解を深めている。〔知・技〕(2)エ
(5) 「読むこと」において、文章の構成や展開、表現の仕方、表現の特色について評価している。〔思・判・表〕B(1)ウ
(6) 進んで小説や随想の表現の仕方・特色をつかんで自分のものの見方・考え方、感じ方を深め、成立した時代や背景などさまざまな角度からそれぞれの作品を考え、今までの学習を生かして、人称・時制に注目して文章を書くことを通して、作家の工夫を理解しようとしている。〔主体的に学習に取り組む態度〕

（小平麻衣子）